

## <2019年度長野大学研究助成金による研究報告>

### (準備研究)

## コンパッションとスティグマとの関連

### —援助要請の促進という観点から—

佐藤 修 哉\*

Shuya SATO

#### 1. 研究実績の概要

調査に取り掛かるにあたり、コンパッションについての文献研究や近接領域の研究者とディスカッションを重ねた。その中で、スティグマとの関連を調査すると同時に、そもそもコンパッションとは何であるのかということをはっきりさせるための調査を実施する必要性が生じた。コンパッションとは、英和辞典では「優しさ」や「慈悲の心」と訳されている。確かにそのような意味を有してはいるものの、英語圏で使用される「コンパッション」のニュアンスを十分には表現していないと考えられた。Gilbert(2000)によれば、「困難を認め、引き受ける」「勇気」などの意味も含むと指摘されている。したがって、「優しさ」「慈悲の心」という側面からのみコンパッションをとらえることは、構成概念を整理しきれていない。そこで、コンパッションの持つ意味を、実証的に明らかにすることも目指した。

具体的には以下の調査を実施した。大学生を対象とし、ウェブ上による調査を実施した。データ収集については、クロスマーケティング社に依頼した。収集されたデータは300名分であった。注意深くデータを観察し、明らかな不正回答と判断される対象を削除した。その結果、216名が分析の対象とされた。回答者の性別についての属性は男104名、女109名、その他3名であり、平均年齢は20.76±1.47歳であった。

使用した尺度は、心理専門職への援助要請に関する態度尺度短縮版(ATSPPH-SF)5項目(佐藤他, 2014)、心理専門職へ援助要請することに対するセルフ・スティグマ尺度(SSOSH)日本語版10項目、価

値とコミットメント尺度(VOYAGE)15項目(Ishizu et al., 2020)、選択場面における勇気尺度26項目(堀合, 2011)、日本語版セルフ・コンパッション尺度(SCS-J)(石村他, 2014)、The Compassionate Engagement and Action Scales日本語版(CEAS-J)39項目(Asano et al., 2020)であった。いずれの尺度でも天井効果及びフロア効果はみられなかった。

内的一貫性を確認するために、 $\alpha$ 係数を算出したところ、ATSPPH-SFが.827、SSOSHが.790、VOYAGEの価値の明確化とコミットメント因子が.907、回避の持続因子が.798、勇気尺度が.870、SCS-Jが.870、CEAS-Jの“for self”因子、“for others”因子、“from others”因子がそれぞれ、.873、.935、.942であった。したがって、いずれの因子においても十分な内的一貫性を有していると判断した。

そこで、それぞれの変数の関連を確認するために、相関分析を行い、Pearsonの積率相関係数を算出した(次ページ表)。

その結果、SCSにより測定されたセルフ・コンパッションはVOYAGEのいずれの因子とも有意な相関があり、物事にコミットメントし、困難に対しても取り組もうとする態度と関連があった。勇気尺度とも有意な相関があった。CEASにより測定された、コンパッションについても、“for others”因子と回避の持続因子には有意な相関がみられなかったが、それ以外では有意な相関がみられた。したがって、コンパッションは「物事にコミットメントし、行動する」ということや何らかの選択場面において「勇気」をもって行動するという事と有意な相関関係

\*社会福祉学部准教授

表 相関分析の結果

	CEAS_self	CEAS_for_others	CEAS_from_others	VOYAGE_価値の明確化 とコミットメント	VOYAGE_回避の持続	勇気	ATSPPH_SF	SSOSH
SCS	.353**	.007	.231**	.351**	-.445**	.364**	-.026	-.191**
CEAS_self		.636**	.593**	.398**	-.279**	.479**	.162*	-.214**
CEAS_for_others			.662**	.275**	-.128	.388**	.196**	-.167*
CEAS_from_others				.392**	-.206**	.401**	.173*	-.167*
VOYAGE_価値の明確化 とコミットメント					-.175**	.676**	.068	-.249**
VOYAGE_回避の持続						-.412**	.056	.314**
勇気							.040	-.257**
ATSPPH_SF								-.246**

にあることが示された。これにより、「優しさ」という概念のみがコンパッションを構成する概念ではないことが実証的に示された。今後の研究においても、本研究の結果を踏まえた研究計画を策定していく必要があるだろう。

ATSPPH-SFにより測定された、心理専門職への援助要請に関する態度についても、SSOSHで測定された心理専門職へ援助要請することに対するセルフスティグマと有意な相関関係にあった。これにより、援助要請はスティグマと関連があることが示された。今後、援助要請促進の活動を進めるにあたり、スティグマを考慮した介入が必要となるだろう。

他方、ATSPPH-SFはCEASとは有意な相関ではなかったものの、その係数はかなり小さいものであった。今回の結果は慎重に解釈する必要がある。コンパッションには前述のように、困難なことにも勇気をもってコミットメントしていくという側面がある。したがって、理論的には問題解決のために心理専門職のところへ行くという行為は相関関係にあると推測される。しかしながら、今回の調査ではそれが実証されなかった。媒介変数の存在を考慮することや尺度の選定に問題はなかったかということも、もう一度詳細に検討する必要がある。

研究発表（令和元年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（ 1 ）件

著者名	論文標題				
佐藤修哉	カウンセリング場面を想定した場合におけるクライアントの自己開示 一性別と神経症傾向に着目して一				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年		最初と最後の頁
長野大学紀要	無	41 (2)	2	0 1 9	35-43

〔学会発表〕 計（ 1 ）件

発表者名	発表標題	
佐藤修哉	スクールカウンセリングで生かせる3Cとは？（自主シンポジウム）	
学会等名	発表年月日	発表場所
日本教育心理学会	2019年9月14日	日本大学 文理学部 3号館